

第2節 感染症対策の推進

◆ 感染症対策の推進 ◆

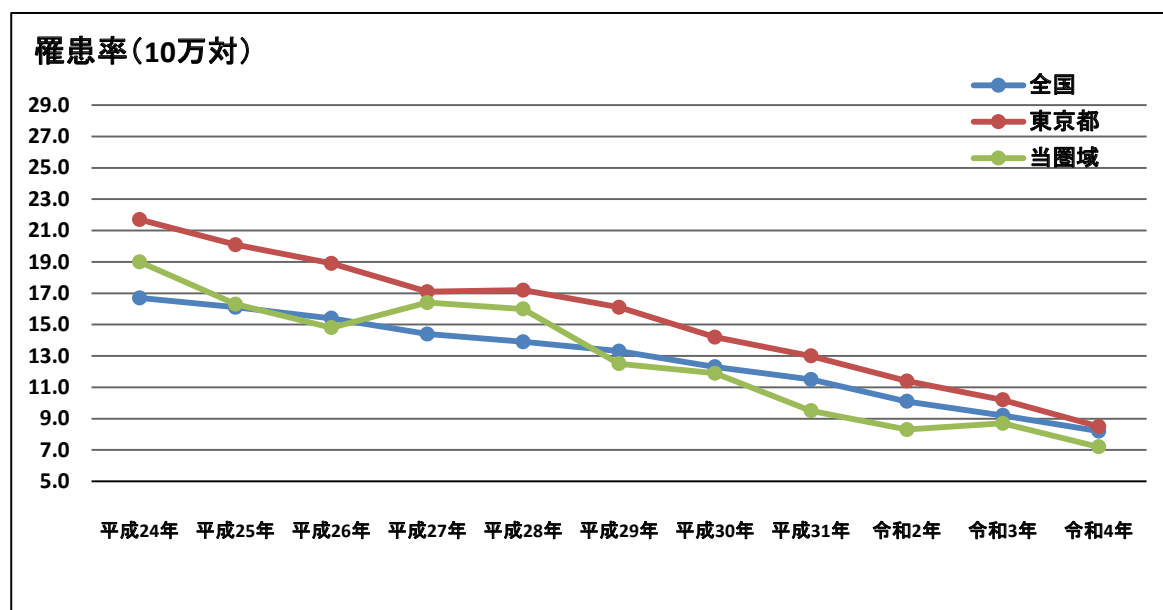
現 状

感染症を取り巻く状況は、時代の変化、人・物の移動、開発等による環境変化、社会活動様式の変容、保健医療サービスの高度化により大きく様変わりします。生命予後や生活の質の低下に関わる感染症の中でも、特に公衆衛生上の予防施策を推進することで感染拡大防止が期待できる感染症については、普及啓発や感染経路に応じた対策強化が求められています。

■結核

新規登録患者数は平成29年以降減少傾向が続いており、令和4年の罹患率（人口10万対）は全国8.2、東京都8.5、当圏域7.2でした。また、東京都の新規登録患者のうち外国出生患者数の割合は令和4年は13.2%で全国の11.9%を上回っています。当圏域は8%となっています。

結核罹患率の推移



資料：東京都健康安全研究センター「東京都における結核の概況 令和4年（2022年）」

■HIV・梅毒

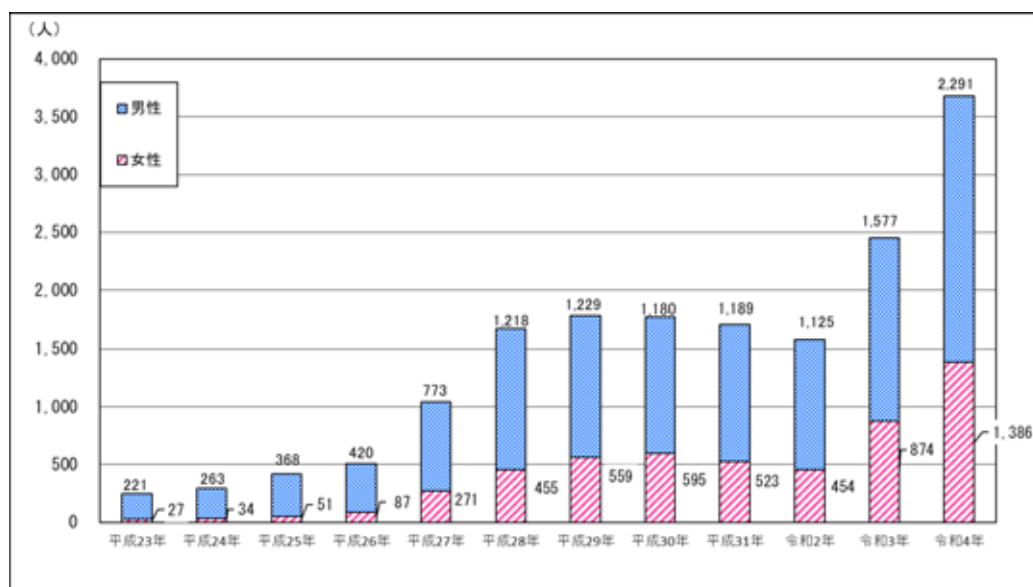
東京都のHIV（ヒト免疫不全ウイルス）感染者は20歳代から30歳代、エイズ患者は30歳代から50歳代が多くなっています。

令和4年、都内のHIV感染者及びAIDS患者を合わせた届出報告数は288件で、全国の約33%を占め、そのうち日本国籍男性は81.6%、男性同性間の性的接触による感染が75.0%でした。国内では平成20年まで新規報告数が毎年増加していましたが、横ばいに転じた後は、平成25年をピークとして減少傾向となっています。HIV感染症は無症候期の長い慢性感染症のため（HIV感染後エイズ発症まで一般には5年以上を要する）、エイズ発症によ

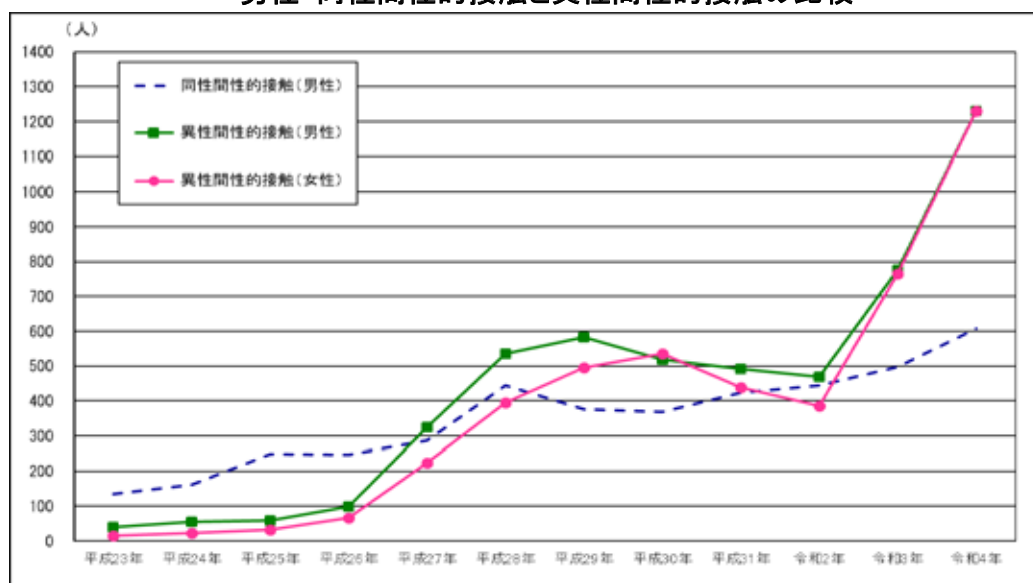
り初めて HIV 感染が判明する例（いわゆる「いきなりエイズ患者」）が、新規 HIV 報告数の約3割弱となっています。HIV 感染症は適切な治療によりエイズの発症を抑えることができ、感染前とほとんど変わらない生活を送ることができます。そのため、HIV 感染の早期発見が重要であり、社会全体の感染拡大防止に繋がります。

また、平成 27 年以降、国内では梅毒の患者報告数が男女とも急増しており、特に 20 歳代女性の割合が増加しています。推定感染原因別では、男女ともに異性間性的接触による報告数が増加しています。

梅毒患者報告数の推移（都）



資料：東京都感染症情報センター「梅毒の流行状況」（東京都 2006～2022 年のまとめ）

梅毒患者報告数の推移（都・推定感染原因別）
男性・同性間性的接触と異性間性的接触の比較

資料：東京都感染症情報センター「梅毒の流行状況」（東京都 2006～2022 年のまとめ）

■麻しん

日本では、平成 22 年 11 月以降、海外由来型のみ分離検出されており、平成 27 年 3 月 27 日、世界保健機関西太平洋地域事務局により、日本は麻しんの排除状態にあることが認定されました。麻しんは、罹患すると高熱などの症状を呈する他、肺炎や脳炎などの重篤な合併症で 1,000 人に 1 人の感染者が亡くなると言われています。また、回復後も長期の潜伏期間を経て進行性の神経症状を呈する重篤な後遺症(亜急性硬化性全脳炎)を発症することもあります。空気感染を含む多様な感染経路を有する感染性の強いウイルス感染症ですが、ワクチン接種が有効な予防法であり、麻しんワクチンの着実な定期接種が求められています。

一方、令和 5 年 4 月以降全国で、海外で流行する遺伝子型の麻しんが、帰国者、渡航者、発症した麻しん患者との接触者に発生しました。国内のワクチン接種率が低下し感受性者が増加すると、海外からウイルスが持ち込まれた際、集団感染等の感染拡大が懸念されます。麻しんに対する集団免疫の獲得には 2 回のワクチン接種率 95%以上の達成・維持が必要です。

課 題

- (1) 各種サーベイランス¹等を通じ、平常時の感染症発生状況を的確に把握することが重要です。発生時の迅速な対応を目指し、各医療機関や関係機関との連携強化・適時の情報発信等、平常時における感染症対策の基盤整備が必要です。
- (2) 特に医療機関や福祉施設等において、実際に現場で対応する人材、各施設での核となる人材の育成や標準予防策²の理解と実践、各施設内での体制整備等の平常時対策の充実が必要です。
- (3) 発生時対応の充実とともに、感染予防策としては予防接種率の向上（特に MR：麻しん風しん混合ワクチン）が求められています。また、感染拡大防止対策として、治療期間の長い結核においては DOTS³による療養支援や、確実な接触者健診の実施が求められています。
- (4) 性感染症である HIV・梅毒は、患者報告数の多い層である 20 歳代から 50 歳代や MSM⁴の方が利用しやすい検査や相談の実施、普及啓発が必要です。

¹ サーベイランス：感染症患者の発生情報を統一的な手法で持続的に収集・分析し、得られた情報を疾病の予防と対策のために迅速に還元するもの

² 標準予防策：米国の CDC（疾病管理予防センター）が提唱した感染予防策の基本となるもの。汗を除くすべての体液、血液、分泌物、排泄物は感染の危険性があるという考え方を背景に、すべての患者を対象に、手洗い、生体物質に対する手袋、マスク、エプロンなどの着用、針刺し防止の内容を行う。対象となる病原体によって感染経路別予防策（空気感染予防策、飛沫感染予防策、接触感染予防策）を加える。

³ DOTS（Directly Observed Treatment Short-course）：直接服薬確認療法。医師・看護師・保健師・薬剤師等が患者の服薬を直接確認する治療法。服薬支援者が目前で患者の服薬を確認する。

⁴ MSM（Men who have sex with men）：男性間で性交渉を行う人

今後の取組

(1) 感染対策基盤整備の推進

保健所は、医療機関からの届出や地域の感染症流行状況について当圏域版の感染症週報¹を作成し、ホームページへの掲載等により、発生状況を速やかに還元します。また、新たな感染症の発生に備え、関係機関との会議の開催、患者発生時訓練、研修会・講習会等の実施により、当圏域の連携体制の強化に努めます。

感染対策向上加算1 医療機関²は、定期的にカンファレンスを開催し、地域での感染症発生状況や薬剤耐性菌対策等に関する情報共有・連携協力のためのネットワークを形成し、新興・再興感染症発生時にも迅速な連携を図れるよう体制づくりに努めます。

(2) 平常時対策の充実

保健所は、連絡会・講習会等の開催等を通じて、施設等における感染症対策の核となる人材を育成し、施設の感染症マニュアルの整備、標準予防策の徹底、感染症発生時の適切な対応等の普及啓発に取り組みます。

(3) 感染予防・拡大防止対策

市は、医師会等と連携し、予防接種率向上に努めます。

市や各施設等関係機関は、感染症週報等の活用により、季節性インフルエンザや感染性胃腸炎などの圏域の発生状況をすみやかに把握し、感染症予防に努めます。また、集団発生時には、保健所と連携し、まん延防止に努めます。

保健所は結核対策として、DOTS および接触者健診を確実に行います。

(4) 普及啓発

保健所は、患者報告数の多い20歳代から50歳代やMSMの方が利用しやすい検査や相談を実施するとともに、各月間等の機会を活用し管内大学等への普及啓発に努めます。

➤ 保健医療の指標

重点目標	感染対策基盤整備の推進
指標	感染症週報の発行 連絡会・講習会の開催、内容の充実
ベースライン	週報の発行：週1回 連絡会・講習会の開催：年間各1回以上
指標の方向 目標値	充実させる

¹ 感染症週報：感染症法に規定された疾患の患者を診断した医師からの届出を調査集計し、地域でどのくらい発生したのかをまとめたもの。全国版は国立感染症研究所、東京都版は東京都健康安全研究センターが発信している。

² 感染対策向上加算1 医療機関：令和4年度診療報酬改定により、感染防止対策加算を感染対策向上加算に改称し、平時からの個々の医療機関等における感染防止対策の取組や地域の医療機関等が連携して実施する感染症対策の取組を更に推進する観点から要件が見直された。感染対策向上加算1の届出を行った医療機関

コラム

結核 DOTS カンファレンスでの
病院との連携

-保健所-



保健所では結核患者の療養支援を行っています。結核治療の基本は規則正しい服薬です。薬は、病状に合わせ3～4種類を組み合わせ、おおよそ6～12カ月間内服します。結核菌の特性から、症状が改善した後でも決められた期間、毎日服薬を続ける必要性があるため、患者さん一人一人に合った支援を行っています。

結核の新規登録患者数は減少していますが、高齢者が占める割合が高く、認知症や他疾患の合併があることも多く、家族や地域関係者とご本人に合った服薬方法を検討し、支援をしています。

保健所では、結核病床を有する医療機関で開催される会議に参加し、医療機関 DOTS（服薬支援）との連携を図ることにより、治療継続等療養支援に努めています。

令和5年度は、複十字病院と東京病院の定期的な DOTS カンファレンスに参加して、結核患者の情報共有をタイムリーに行い、連携しながら結核患者の療養支援に努めています。



複十字シール運動の
イメージキャラクター
「シールぼうや」

コラム

肝炎ウイルス対策事業

-市、保健所、東京都-

ウイルス性肝炎とは、ウイルスの感染によって起こる肝臓の病気で、ウイルスの種類により、B型肝炎、C型肝炎等と呼ばれます。肝炎は、感染していても自覚症状がないことも多く、感染原因も感染者の約半数は不明です。また、感染した状態を放置すると慢性肝炎から肝硬変、肝がんに行進する場合があります。

B型肝炎では、持続感染したウイルスを身体から完全に排除することはできませんが、適切な治療により高率にウイルスの増殖を抑えることが可能となりました。またC型肝炎においては、近年の治療薬の格段の進歩により、しっかり薬を飲みさえすれば多くの方が副作用なしに短期間で治る時代になりました。このため、検査で早期発見し、早期に治療を受けることが大切です。肝炎ウイルス検査は、各区市町村や東京都が実施しています。

保健所では、B型・C型肝炎ウイルス感染者を早期発見し、早期に治療につなげ、肝硬変及び肝がんへの進行を防止する目的で、過去に肝炎ウイルス検査を受けたことがなく、職域や健康増進事業等で受検機会のない者に対し、検査を実施しています。

また、東京都では、平成26年9月から、肝炎患者等の重症化予防推進事業の開始に伴い、保健所で検診を受けた陽性者に対し、陽性者フォローアップ事業参加案内、初回検査費用助成等の事業説明、受診勧奨や受診状況調査を実施しています。



東京都肝炎対策キャラクター かんぞうくん

コラム

性感染症予防の普及啓発 若年層に向けた取組 -保健所-



保健所では、HIV 抗体検査と性感染症検査（梅毒血清検査、クラミジア抗体検査、淋菌検査）を無料・匿名で実施するとともに、各種相談やHIV/エイズ・性感染症に関する普及啓発活動を行っています。

東京都内の梅毒報告数は、平成27年以降急増し、女性では20歳代中心に増加しています（本文127ページのグラフ参照）。また、感染経路では異性間性的接触が同性間性的接触を上回った点や、母子感染による先天梅毒児の出生が増加するなど、公衆衛生上の対策の方向転換が喫緊の課題となっています。

令和5年度に、性感染症や予防方法に関するリーフレットを新たに作成しました。リーフレットに、性感染症グッズ（コンドーム）を封入し、HIV 抗体検査・性感染症検査実施時に配布するとともに、若年層に向けた取組として管内8大学にも配布しました。

今後も、若年層に向けた性感染症の予防行動を推進する取組を進めていきます。

今から、そしてこれからも予防

性感染症予防グッズ入り

性感染症って？ 梅毒・HIV・淋菌・クラミジア など

性行為（陰・肛門・口）により感染する

コンドームで予防ができる

男女共に不妊の原因になる

免疫ができないため何度でもうつる

症状に気づかないまま病気が進行する

無症状でも相手にうつす可能性がある

性感染症から身を守る方法

性行為の最初からコンドームを正しく使用しましょう。

細菌やウイルスを含む体液が、粘膜や傷口に直接触れることを防ぎ、感染のリスクを低下させることができます。ただし、完全には予防できないので、「感染したかも?」と思ったら検査を受けましょう。

読んでね!

自分や大切な人を守るため、**予防**が大切です。

性感染症の不安がある方へ

- 東京都性感染症ナビ
- 東京都HIV検査情報Web
- 東京都新宿東口検査・相談室
- 東京都多摩地域検査・相談室
- HIV検査・相談マップ

検査や性感染症に関する情報が得られます。

多摩小平保健所では、匿名・無料で一部の性感染症の検査や相談を行っています。詳しくはホームページ「感染症に関すること」をご覧ください。

多摩小平保健所 保健対策課 感染症対策担当 TEL: 042-450-3111

発行/令和5年10月
編集発行/東京都多摩小平保健所
保健対策課 感染症対策担当 電話: 042-450-3111
登録番号/55
印刷/社会福祉法人東京コロニー

r2100 リサイクル推進

保健所が作成したリーフレット